

具原町人集
利



阿仁
1713
3

町人囊寒五

童女の青物語より鳥鷗小いふいふ
報なりんか水の上に身を浮かべしきいふ何の
苦勞もか腹の下なり魚と安くと取て食ひ給ふ
ものれ我々の終日飛つたても食ふあつてさう
きほ乾つる魚又い菓子なりけり付ても皆主
有て守りていふいひのぬい中てさうぬい得
あまのじ此ぬい食つてふふさうて若く癒れて
羽を息めんとしてあふ止れい又脚の旁より清身
とまひて水へい魚かさんといふいふ水

喰ふあれ美しし鷗殿や飽満より食ふがや此方す
施し給へる吝惜は公の心より鷗殿とて云鳥殿く
さあさいあひさう後よりんさうさう水は深て何の
苦もなくて食ふ得たりと云いさうふれと水の中
とて是で働かず事少く済す其苦勞を承けし
ふわらひ其さ果て生る物なれの中くを易く取
得る事うに上より足給ふと水中の働さといふ
お遠わのこさひさう大海廣々した終日魚の多
くと合ふれさうあり或い風波もけき何の終日
巖定より食ふとて事少くおさわり兎角うな世に

自由の豊かさを得し中より事少く施す事少く済す
そゆめがさうして清身ひらと云ひ給ふはくも同
林のタムはそゆめをさういひくも事少くいひて
苑まふさうや人の世れを極まてかへさ
或人の云公儀と恐れ給ひ事いさう人の第一肝要
かなん公の字のやあけと後て天理すで私るた
事と公といつう天子の万民の上の最後の天道の
清名代と云ひて天道と恐れ給ひ万民と教
誡め給ふ其は度は武ふる天理のやあけあて
清身の私よあひといふをて禁中れ清身と公儀

とい申奉る也禁中様と執事給ふ節會行奉
との公事といふ又世俗は晴る所いふ事と公界お
出るといふ禁中へ参るを也武家の時代となりて
よりの將軍家の法事いふる公け字と分て公儀
といふ也將軍家の天子の御名代も後繼ひて天下の
政道をばさるる給ふ也天子將軍つかへて天道
ふさるる給ひては又禁制といふ給ひ四民は天子
將軍の法事いふ事ては又禁制をばさるるて天下
を平也其は又禁制い何事とていふれ一切の惡行
より惡行の第一い何事とていふ亂逆なり亂逆の

始い何といふといふは著也不忠不孝の五逆中惡
の數に皆此毒のなりをわくる也神罰なり
當る條目とて山金給つる此のけは又禁制の國お
より時代は後といふるありといふ此天理のけは又禁制
い万代不易の定はて目守といふは及に唐天皇は
業隆國といふたよりなりとて天理のけは又禁制とい
ふまはじい人を公儀の身とていふて世俗は風俗
をばさるる人て公儀者ありといふ給ふ也それい浮
世人といふものなりとて給ふは

或人のいふ町人といふ先祖の墓地を餘りに構ひ

ていふ所のも唐より父母先祖の墓地風水ある
時其の地好しの風水ある時其の子孫繁栄し
しといふ其言は公撰する也上代よりなる也聖賢
の風水を撰ひ給するは子孫栄々の秘なり其
唯三代よりて田地あるかなるは其の地堅固
なる地を考へ撰ひて葬るは父母先祖の體
の速く腐損あるを痛て考へるの誠を用ふる
子孫の富貴を求め給ふなり其此は宋朝の儒
者風水の言と撰するを説く書給ひし書
ふなり子孫の盛衰禍福は葬地風水の言と

より其道理は日本の天子攝家乃清廟地盡く風
水圖にもあるなり其は子孫今も公絶然と
父母先祖の死體朽損を以て全き時に其子孫幸ひを
受た體全の言は子孫好なりといふ日本は武軍
陣を討ひて首を歟とせし死骸は野に腐るは
水に没し或は火葬して骨を焼損し人れ子
孫の盡く貧窮ありて禍を受はる事ある言て
かなるなり其や鬼角人の禍福は先祖の葬地
を以ていふなり其言は其言は其言は其言は
其言は其言は其言は其言は其言は其言は

む親妻子堅固也是孤のやうな者およりいふ
 ころ是の類は相遠ある後いふや雄鶏の鳴
 かに常れ来にて何の怪もするなりわに書ふ牝雞
 乃晨は孤家のけり也といひえい女人は男とに
 至て國家の政道に出入るれ類は禍の本也といふ
 を世俗といふなり諺とあるなりて女を識
 めるもの也楚辭は金の鳴孤諺は金の鳴ふなり
 此を金の鳴は不祥といふ也日本にて女を有
 る者といふ仕合は此の仕合をあらわす吉瑞と
 世に不仕合の世なり此の仕合をあらわす凶兆なりと

教をうへにけしは佛神よ教をうけて祈加持する
人よ不幸幸福の事有ては神と常に教を念する事
もまた人の幸福なる有あり此理にききしるる人
唐土日本にて大悪人と稱する歎後しては死後火
車に乗りしるを因とて吾人よ其の幸不幸
横難の災厄得するも多し是つふもや雷ふられ
て死し火車あつてもなりといふ人吾人豈にいふ人や
或人けえいといふ人間の別はあつては事と神明れ智
をうて圖とていふとて吾人よ極める物に幾の道
理あるか必となするは但たありて是は吾

思ひ思ふる人の智慧を別して知く神の事を
おん致し圖とていふといふ人は能なるも又人の
身上に過るる商賣とてまた商人事と教の圖をう
ちて七損徳ははとる事ありは道理は遠なるも
教は其のありてありといふ人其の教を身に不
相應の教いと企てまた商人と教を公則天理に背く
事よさや如圖やいふとてまた人の教を教へる人
なりぬるもかきしる天理は思ふ事なり人の教を
教へる人おこるゆゑにさやれはする事ありて
あはれもの也盗人の今夜に盗入てはとるすは損

と云ふは、右をいふ事多しと云ふより、河豚汁を
食ふと危く、海菜といふ物や、其後につひは、
あつたに、ておと、は、い、お、り、又、病人の家必
と、方角の吉、は、い、て、吉の方、は、醫者といふ、此の方
の醫者と、呼ぶ、は、此の方、を、名、醫、は、指、を、て、ち、り、
方、を、て、邪、正、醫、と、呼ぶ、を、得、に、醫師、多、き、を、あ、い、さ
し、何、れ、田、舎、の、村、里、か、い、醫、者、二、人、い、は、れ、あ、は、
方角と、探、ふ、事、と、い、ふ、い、ふ、と、病、室、を、後、と、る、事、の
つ、は、は、泉、別、堀、の、く、一、方、大、海、を、人、家、を、た、れ、あ、い、
日本、ふ、多、し、傳、う、て、醫、者、の、方、を、を、い、て、西、方、は、

醫者、れ、素、か、い、て、い、本、漢、か、い、て、四、國、より、醫、者、と、い、
ふ、ふ、や、四、國、土、佐、の、南、は、海、多、き、を、あ、い、と、南、方、の、醫
者、は、じ、う、て、より、い、府、の、琉、球、國、か、い、より、醫師、と、い、ふ
か、より、外、の、い、ふ、事、は、い、て、い、て、あ、い、ゆ、り、ぬ、

或、學、者、の、い、ふ、は、法、徳、の、學、問、と、る、人、は、徳、を、す、る、人、は、肝
要、な、は、難、し、と、い、ふ、唯、今、貧、乏、の、百、兩、れ、金、を、拾
ひ、て、其、主、と、尋、ね、金、を、返、さ、す、か、い、わ、い、此、人、を、い、神
とい、ひ、て、も、い、ふ、い、ふ、も、也、貧、乏、の、人、い、ふ、も、及、い、て、富
か、い、たり、た、百、金、を、拾、ひ、な、い、主、を、待、て、返、さ、す、今、の
世、は、い、稀、か、い、一、見、より、安、ん、だ、人、は、い、ぬ、い、ぬ、

うれくはわがらひ給ふるや神奉りよるうへと
事と新記彩ひふり上座り無徳也神とて佛神め
かめそや但佛神と給ひて和光同塵され其
威光弘く給ひて慈悲の神肉體して万民を濟す
やまけの道の中にも神も弘くされたる和光同塵
とてうへ人よりあつたや塵弘く給ひて事ハ
その道に華弘くされたるやういふある下凡の
やま弘く給ひてとて給ふるを同塵とい
う今時のまねには華とて給ひて思ふに
佛神は凡縁と給ひてやの給ひて偶ある事ハ

あそわれうけう神仏佛難儀はかたしん後を
編のやありてみらぬとあううととと
やいふて我いのと又古きとととと新
かめううふととととととととととと
有るはあへのやありとれん

あそ人のいつふ唐土の古き書ハ日本に
後し其中に日本ハ質直とて盜賊ある國ありと云
ふ書後し日本よ大の人ハみな直質素とて盜
人ともりしと云ふ又近代の唐乃書ハ日本ハ
盜賊殺害弘くしてと云ふ國ありと記するを

を有てし教はけりかえりしはよのちのけりてまゐる
かくはるりの借りのをせりふ白く糸備へるくし流
るるるるのそとせりけりてやま

わが町人れ文育なり實子なりて奉りてはよのちのけりて
同は志して四書五経なり或何子墨子のうしに揚氏なる
我ふすくしよとるりしよふかろふくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
熟より昔の聖人賢人なりんのをすまわくくくく
りしてはるり汝と書りて全く人れふふわは我汝
ふやふいふんこの事也まれりあそりわらんるふわ

とやいひて感涙とありけりて揚氏と書りてはよのちの
わが町人れ文育なり實子なりて奉りてはよのちの
のうしに揚氏なるのうしに揚氏なるのうしに揚氏なる
わが有職者のいふる謚の院号なり天子皇后のわが
りし其後將軍家攝家大寺家院号あり二百年
いふ大寺名ふくくく院号あり五十年此くくく町人百姓
なまそ多く院号付事なりり時世のありありとい
ひありてはよのちのけりてはよのちのけりてはよのち
よりそはるり且那へり揚輝りり院と謚号なりと
且那へりるるるるるるるるるるるるるるるるるる

みぬていつれ世のあらうとあはるもの也日本いつま
の記録書籍あはる人院と稱てふれうなるや
あらふて一時のやう帰てき態の帰るさゆへ
あらふといふれうといふ族とあはる大なる僻言
あらうに後一理と帰てき態の帰るい何そ富浪
たう具那のふれあゆうえんや何院殿何大姉を
其品いづかぬとてふれ此と後ハ財主次第と
何如た何大をあらう町人ともうする何のあらうと
わらふあら富浪とてはひり子孫富浪の餘
みぬ判官とてふれいふは源の判官殿とてき
あら

より物をとて人のいふれいけあらうとていふ業平にあら
わらふとて中將とてはひりやあらうとてはひり又居るも道
徳者を稱てふれ又いふ道徳とてはひり官禄を有て
富る人とは稱てふれ又いふ富る人とはいふ官禄祐
ひらふとて町人とはいふ金銀財物とてはひり富る人を
あらうといふに貴け字は官位あらうとてはひり富る人を
稱ては居るといふ事と官禄有る人の事也況や士とて
いふ儒者学者の位はあらう人をいふとてはひり唐土とては
道徳あらうとて官禄あらうとてはひり又富る人とは
信士とては居るといふ事と家也日本の町人百姓何乃

位より尊徳するを則ち信士とて非禮
也又塔婆の銘なる町人け俗名何れ清門尉何れ
清尉と書るも後尉は衛府の官名なりて五位六
位の人よりされし尉といふき理は或所の番を即
根籍者なり人をわきまらるふはあつて
そらびい書をその尉家のありて名をて働
けりてあんなれりるいふやとあり
或人の云分限者と今持といひては分限といふの
限りと書ておのころ月れ一分お趣のうきりあり
をわて身のかたまりとていひ相違れあるまいとて

過分の財をねらふ身と静ふく公安樂なりとて
くはんと分限者といひて今持といふは身と安き
事と不知今公に公より集る事と樂といひて
おれり静なりといふはあつて公に公に公に
おれり同じやうな事なれり公に公に公に
おれりおれり公に公に公に公に公に公に
評判の町人公に公に公に公に公に公に
の公に公に公に公に公に公に公に公に
者と公に公に公に公に公に公に公に公に
も町人といふ事なり公に公に公に公に公に公に

ふたつは誠の教をたふふよりてううう唯公限の三
字ありてふおとをーと諸れー
或は學者のて聖人の沛詞い貴賤上下いよりていつな書
いはれ諸て人の教誠いふふはは聖民にれ
通風の道理ありきき其にありて金に多
き者君より人へい度より上の人の教ありて町人
百姓ふにありて教とれ町人百姓い人よ其あ
らうものありよう人へをい身世さう町は
度人のつう其風俗さうて天下平うなる理さ
まて民をいようきい知さうはてきて度人へ

の教ありてふもの也但孝經は王のすは用い地の利
因て身と謹と用と節とて父母と孝うい度人の孝あり
と聖人の作をいりてはありて町人百姓のの
教ありて沛詞也王のすは用い地の利は因といれを
百姓農業のふあり商人職人といて王の町地の利
を考へといありて用は節とて身と謹とて四
民の第一は誠也ふ町人の用は節とては
わう肝要なる事也町人の身をて人を怪と事
れ西より此用と節とあるなるなりねなり兎角
質素儉約存とすふき理とて節の字はう

外にたゞの鬼にも角がせきとて内をのほろび
 右のくさふ勤王の事へ貪賤たる土民といふも
 仍いふ事なる也と自^と白^とといふ二年に一日也觀の忌日か
 といふはあまの太悪百たれい萬^{まん}は用也くは毎月は
 日の儒道神道といふたふくくくく日の教い合^ありとい
 へも何節遠^とつる教之町人百姓といふた世は自^といふ母
 の終るは一日たれい終日くくく(のを紙をで喪^もの
 うられぬに潔^と前^とに七家業職分を付て一日の潔^いを
 ぐまけいさう何い其役儀を勤^いちあふ何れ人^との
 自^とふくくくくでたのうられ情^じを中^ちさう也美^みく

衆人のまを天地の間より人を貴んたものか其智恵なり
ゆかり又天地の間より人を貴んたものか其智恵なり
智恵のゆかり也此智恵の善と悪との差のゆかり也
根本の真智恵の悪なりは理ありて人なされて習
ひて長し真智恵の邪智恵のゆかり也此邪智恵の
間とけして畜養のゆかり也此邪智恵のゆかり也
かり畜養のゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵の
ゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵のゆかり也
此邪智恵のゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵の
ゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵のゆかり也

くそを我れい也又畜養のゆかり也此邪智恵の
ゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵のゆかり也
此邪智恵のゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵の
ゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵のゆかり也
此邪智恵のゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵の
ゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵のゆかり也
此邪智恵のゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵の
ゆかり也此邪智恵のゆかり也此邪智恵のゆかり也

若く者多し是より金銀有人のすむで我はこれの
一銭のより者より傾城粒飯の終よりなされるあり
何れと執持のやうに執のたれとを理され去るあり
つれづれに少金銀おとるよりつれづれに少
わう人のいふ簡畧といふ何れも略する候やとわう
誤る簡の字にあやゆと後なる字にて一切の物毎に要
なる候の故そそむ付事とをば致しと致すも致さる
し事とを略するは簡略といふ也其の要と撰て要
を略する意也此簡畧の候は貪窮めりといふ意あり
なしておのつゝゆづりたれはけで執るひに不及

唯留事ぬるは悟する事道と簡畧よのゆづり
いつれも下おのつゝ簡略ゆづりものなり聖賢の道も
簡略と先くなすものなりといふ

或人けえ樂より二つあり真樂俗樂とや若くは二つあり義
若く欲若く也天地人物の理とあるは其道と樂は
真樂也飲食名欲遊興は俗樂也聖賢のく其所作
て執て五倫の束ふいゝはるは義若くは源より安する
事と不得是事と不知して終日求めて止るは欲若く
せん真樂義若くは事ありて人間自然の道をいゝ通
せんとしてより俗樂と欲若くは人心の私よりあり

享保四年孟夏吉旦

浪華書舖海部屋多田勘兵衛藏

町人囊底拂上

人のいふはたふれいなりあつていまの事
めでたう終るなりと此聖語久しく耳ふ
ふれどもあつたはれなくおのれ事なりと
とくゆるぬあつて耳順ふとくといふ
此身のかゝる体とされしとて圓妙なる
而もこれ言とあつて忘れとておのれ地して
櫃をとりて珠とく恨とあつておのれ
そふふ後の忘れとて直とて一文とて衣
の玉とてあつていなりはたの悔とて身を

はそ人のいふをゆるいされいねとせよとて
家童の袖をかきしき失ふやうなる様なり
むのうらふて世はいづうとせ

直の字の此國の言葉はくふこのまふかまふ
とせられといひていふなりといひて曲なり
するといひて事なる誠なるなりといふなり
といひ身のえさふれ曲なりといふなり
なりといふなりといふなりといふなり
といふなりといふなり

直は天理なりといふなりとて直くば千萬人といふなり

吾ゆへいといふなり天理と抱きてなり天理の味
方より對する欲ありなり二徳五常もみなり直の
異名なりなりなりなり萬國の道といふなり
質直のなりなりなりなり天地日月星辰
なりなりなり本火土金水おのり相生相尅
なりなりなりなりなりなりなり直道也
なりなりなりなりなりなりなり直きなり
なりなりなりなりなりなりなり都て人の惡と
なりなりなりなりなりなりなり是なりなり
公自然の惻隱なりなりなり此なりなりなり

欲ふしき氣を奪^うて動^かせむとて欺^かむ
いかに直^ちき本に曲^まはれむとて世^よからん
をばゆるすた押のよは赦^{ゆる}と事^{こと}あらん直^ちき本
のむかひ

本朝の事に神と歟との二つありの外に多^くいふに
よけふなりとあるものけし此國は智者ら
此國とのつれ理とあるは信^{しん}するのほく人のまに
して世に用^{もち}ひうたれむと慮^{おもん}む此國の人れを
うめふとすむは世にけしめて世にめしむふ
りてあそびめしむありあそむ人の國より傳^{つた}え

ありしきいにてしむるも此國水つらうをの
はるれとむるはけしむるは人のまにわ
なやむとすむとかりゆめはめきん屋と
かた神なりとかりけしむ此國はむれとい
すむる人なりと此國はあやとめくやとめ
あやとめいにてむるはとむとあやとめ
いふとめい本にめくめたるはとむとめ
らむはとめいむるはとむるはけしむと
やとめいむるはとめくめたるはとむと
異^{ちが}ひありてやとめいむるはとむるはと

めしきとこのそ目なよりこがしむるがそを
あついでいさきき清くやとらるんと水
土の理りふるまてふく國人の益も多かり
やと詩し又かれいなりとらるるよりつて
かれとをのづる今いひやまやとのとが
かれいふはたれともうこし人のあふ其國の
風雅のそふはて能きなりわよのんやま
とふし和奇いふよるも詩し此國のよふ
はくまされそぬまかりわきまふかた此
こりわいりこし人の詩たりた此國を

和國のそて吟詠してあきけいひとて
いよりけりみりひのそ思ふよりたぬ
とくわりのそし人の此國よとめがまけ
子に親の姿ふそを聖のそとされいより
あわそしき何れすのめく姿形の
おのそい愛してわらや上よりゆきわはれ
とらと容れらるいふてやまてよめとて
まねとをのづるれやまやとらおたり其國め
ひられらるのぬりともふらとて人れと
天地のふらとて

しんこ此聖の教の文字として曉く吾國の神
のこゝのやまや諸ありて文字いふ所により
りらひるものなりとて世よりてより此國の
まじりたる人も文字にのちみんをて諸の
まじりたるものなりとて世よりてより此國の
みんをて此國のりんちやうへりたりや孔子
の政とやんといふるが名はふんといふ
まじりたるや我國のやまやとて衆の名實の
衆とばんといふるがまじりたる此身とて
ふはる衆事といふ一つなり又萬物第一は

多目とてはるの義天地の至尊日の精靈とて
の名なり此故に人は神魂の皆火氣は屬とて
りるこゝにても此理ありや日の字はまの圓形
の中に一は字なりとてや何はれ圓とて人を
天地の靈とて一日の徳とてるふりたり
りや人といふを添く大とて人といふを添く
りる人といふ地と二りたりは相離る事なり
をいふ此理とてりて此國の神道とて唐の聖
教とて別はるるなりとていふなり
此國のまじりたる人をまじりといふ衆の始祖といふ

の氣の凝結と一なりなり
夫と背といふ婦を妹といふ唐土の陽と先とて
夫婦といふ日本は陰と先とて妹背といふ
ゆゑの事ありといふ女乃通稱とておく
若と妹といふ夫と對といふ親なり背といふ
ゆゑなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
此といふ別乃道ありて押と引とをいふ
坎水離火を妹とて相對といふなり水
火の氣平和を得て萬物を化生むなり
水乃の氣平和を得て萬物を化生むなり

女より引く別義ありゆゑは夫婦和むなり
そととて西より男女の世のみなりなりなりなり
よりて知て又艮の卦に義理ありて背止
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
兄とてといふ弟とてなりなりなりなりなりなり
通用して子のなりなりなりなりなりなりなり
男子はといふ妹をいふ姉とてなりなりなりなり
いふえいなりなりなりなりなりなりなりなりなり
いふ女子乃のなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

子のあつちやいおしり人といふやうなりおとを
共いつう十干の陰陽をわけて兄弟とてえと
つて立約おのゝ先後強柔ありてなり十干十
二支皆陰陽とわける時ハ先後はよりやうある
を甲乙といふが如く兄弟の甲ハ弟の乙と助を
告ぐ兄弟の乙ハ兄の甲にうけうす志とていぬ
よく是友悌の道をのづかう理り知べ
こころや

家乃老臣又ハ所屋村里の長たる者故神といふ
といふれり或書より考ふるふ養老年中の此

道君氏首名といふ人あり統後肥後乃守
より州人律令に委く仁政と約いて民を惠こ
陂と築き池と鑿教と無く民を富饒し
百姓と子の如くとて平後統紫の百姓等其
仁德を志し祠建立て神とて祭りたりと
うやゆゑに号いふれに訛りたるべし此故
りや此号統紫より多し郷里乃長は稱を
里やれりきこひし詞も此首名より始り
はよりと對勝の義なり

狂言は此所の目代と名のりて出るわづらひ

かゝる顔なりがわづき也都て世の中れ人ねの
僅く長き事あれば下は海の人な慢き老の
いゆふはくつて身は人けまといふるもの
まはまねくつて世をさるものなりと教
訓をさるる目代といひつゝ一國守地際り
一處より二人は目代と置く百姓とあつて一
たの村里と仕配さし其目代は若くは
屋と号する今村里の長と名をいふが
その國と地頭の目乃代とありて事を行ふ
みれいふまを欲き悲のなるに者い豊氏の害

とありて百姓困窮なるものなりとやね言ふ
とる處の上乃目代といひつゝ名ふれつと氣
中なる目代名をさるるつゝ外のはあ
やうなる高位の人へ下は遠くて下官
早役の人れつと下に傲み有る處をさるる
事なけしむ俳優乃狂言といふやうに
人々をばはきしめしめさるるや
法師が母といふ言に酔ねる人をいふやうにと
るつゝ狐狸といふ人いふやうに後と
諸人いふやうにひとへに人知らぬやうにと

酒よりほれておれずい醒てのう人いや
 りとろの人いはいのどくじそ恥つろとさ
 るのゝあめ本公紙失ふろい執裡と酒や
 何そあめあんはくどく酒は酔ふ人といふ
 おのく本公の病とあつとちり生得柔和
 直ちる氣質の人いものよあていあし
 事ありて酒ろろろ氣質うろろろい
 い葬ろろろろろろい寝ていりろろい
 獨ろろろろ氣質情ころろろろろろ
 殖毒ゆは蟠もろ人酒酔は依ろろ氣質

勃と心公の毒氣介いれし出怒氣傲慢顔色を
 わづれ何の事ぞれは罵怒り座席れ人を欲と
 し身も河の斂力を援ひしに多禮根藉た
 とゆふものふし平生の人品威儀温良ふそ
 一時を亡失とほふ上戸本性あらば
 は是等しや此故り聖人佛祖も飲酒を戒め
 甚遠しといへども末代乃儒者佛者酒と嗜ま
 ざるれいふをたふねせ人多くせよ古田乃
 は師不戸あるをこそおのといへばとていふをねま
 ざらんおのこい玉乃孟は座をたかりし書あるを

呪ひといふ諺は世のそらばぐらゐりやんと
いはく呪ひの主意は氣血をト血脈をト
の術なり氣血をわづし快くとも呪ひ乃第一
薬法用をわづし次は針とて灸とすも呪ひ
なりや按摩とて外より一身をみてさすも又
呼吸を温め或は息風と吹くけて清く又
唾を繋ぐ痛をいかりけりそのまゝみよ見呪
術の根本なり神代乃呪ひ止は乃法といひ
今の世乃祈念呪ひといわづれとぞ
せりとのいふもいふ事妙なき中に神代乃の

放實あはれりやとて世乃愚昧のつひ傳は
も多う草本の中にいふ家一植をタと云ふ
多う此より入れり酸漿といふの家の園
種よりふも福なりぬるやわづれといふも
なごの中いふと多うみよ家とわづれとい
ふ福災ありと云ふは是は極なるや福災
多うあるはこれと云ふ也但神書の中
には酸漿とわづれと訓じて素盞雄の亡く
大蛇の目ふとてわづれのふと云ふり此草
をいれぬる事あるや家の園に植るは

ちほりそりあるし福福のちほりあうぞう
 柘榴を人あふ植るぞと忌人うり母ふ火災来り
 て火災は忌あり此おろ人家小植とて新宅後
 焼乃祝さふは立たふしりと幸なく其家火
 害ふともあはれや忌人ふ天満神の師れ坊よ
 ほろひ師の坊れ靈の妙ふを伝へてやうり
 を怒りて清茶を柘榴の實と嚙んで其妻
 戸よ吐くを忌ひふ火焼く成くもえありじ
 といふり忌火災の来くと忌事ありん
 今天満神と信ふも忌人一生柘榴實を伝

喰事は神の靈あり柘榴而も火焼と
 お焼くは以栗柿何ふより怒りて吐て火と
 ちほりあうぞうに忌人ふ酒さあふりて飯
 中を因石折つる物を吐くいて火焼く
 来ありなひ此神信作乃人又酒を引いて或は
 飯と食する来あり幸ふて柘榴は忌
 こしめをわうたりじい末代の人乃るああり
 ぬしやけりやう柘榴は己午の月よ祝候
 花の色さうり赤く火の色小同己午と火
 ちり其實より忌事ありん其赤き美

るづーるふ

われい実い白さる思さ也実あさるふい多ふい
花白いも実さふあふの稀なりいより松榴
思かりあて孫生のはれつるよりもふらのや
ふはくふつれも其精氣火とさるをまふつと
ふよりいふ本へ石孤あふじよのちるふ松榴へ石と
このより石い金氣ちるあふ火い金孤得てこの
精氣強盛ちるさつりあれと也けいふいより家屋
近く柳の事とさる故實なり也營神のふい
いあふさるふい

山櫻ヤマザクラは實わりといふも八をけろのまゝといふ

實は風流うきうきなふいふあはれ人の子やれた家
にハミ橘のやうい植ふと瓜と下りまゐる人の
たまはれいづくの寺院のわい植あぐさゆゑに育
て実をたいた文のそ多くて質やれた人ばかり君
のふき敷うる松さもあつてまはせむといふ
池をけふあぐい土水の氣よ厚まゆへ無風り
つとてわひと空に翔ふ翅い木より氣に
ふとあまのまきゆへに畫と専らけで夜の夜
是つひの裡たりあつる松ゆへに郭公のうぐい
お松専らうとて畫うれ時ちい空をあつと

いふに樹陰草むしのふたは若て夜高き遠く
飛く啼わりのゆきも常の理にあらざるゆへ
あちうとてものこし人い聞来とをさる我
國の人へさうん賊いさむるゆとふらういん
ゆへも驚の片のちるぬいとの愛とびて愛
ふの郭とぬんともい啼か淫やて人のを
蕩るすも清が納言の驚い夜あらびてぬき
ふれ着らるれまてい啼てうはさく郭の夜
さくまのい啼てくくせきふんふんとい
ふふあふまかりとくわたり郭えれまのあ

予ゆりて郭えはは氣の島て柔弱情慢の物
りやれたるこふぬともい得も驚の果は中い
ゆて驚い告るるやいとも常の理にわ
さありのそおきりさかり蜀帝れ魂魄とい
るあふさまあふふりてあふふも哀悲の音
天地いまはまは人いなり地震洪水大月い天
氣大過り運動萬物の抗氣と都て平氣ふ
帰ふの所より雷い萬物乃繁勃と催い促し
地震い土中陽氣乃大過を洩し洪水い万地
乃燥氣と潤し困濁の氣は洗ふ大月い暑

勢大遠の亂弘制一勢伏の亂弘制と云ふものの
常事なりて天地開きて以来あるものなりと人
ふわりて思ふ事なりと云ふことはあるものなり
うごかしきと云ふなり五所の生起と云ふなり
起ると云ふなり生ずる事なり生し起ると云ふ
起とは生と云ふなり生ずる事なり起ると云ふ
人界同なる情意なり天地萬物永せり
あるものなり

た傳ふ福福無門唯人自取といふ又天作孽不可
逭自作孽不可逭といふ古賢の識なり

民日用の要なり頃日あるものなりいふものを
感ありといふものなり付たり事なり

天作孽猶不可逭

いふものなりあるものなり天作孽の事なり

自作孽不可逭

トあるものなりあるものなり天作孽の事なり

賈誼服鳥賦は福の所倚福の福乃所伏憂

喜聚門吉也同域といふ又同く云ふは福也

禍の何ぞ糾つる縄は異なりん命は不可測

孰れ其極を云ふや此一章深玄なり

書經高宗彤日小天監下民典厥義降年有
永有不永非天^{ミナカミ}天^{ミナカミ}民^{タミ}民^{タミ}中^{ナカ}絶^ツ命^メとつる此句
人事一切の要諦めて一身者性より依て壽の
長短正命非命の如く悟明とて
楚辭^{タチ}は善い邪よりあるに名い虚しくあるに
孰^{タレ}の施^{ホトコ}の^{ホトコ}と報^{ムカ}ひあ^{タレ}孰^{タレ}の^{タレ}不^{ミナシ}實^{ミナシ}とて獲^カ事
わんといふある人^{ヤスクモクニル}世の惑^{コト}を解^{トク}は使^イわ^ハる^ハ諸^{シヨ}侯^コ
詩^シ小^コ弁^{ベン}に君子^{コノリ}無^{ナシ}尤^{モトモト}由^ヨ言^{コト}耳^{ミミ}屬^{ツク}干^{カン}垣^{ケン}とつる和
俗^{ソク}の誘^{コト}は壁^{カキ}小^コ耳^{ミミ}ありとい此句よりあるに君子
のふ^フわ^ワる^ル小人^{コノリ}さ^サといふく^クる^ルものといふと

つゝさ^ツら^ツと^ツ一言^{イツゴン}ふ^フ身^{ミミ}と^トわ^ワる^ルも^モき^キく^クい^イお
今^{イマ}甚^シ多^タう^ウと^トや
家^ケ語^ゴは老子^{ラウジ}れ^レく^クま^マ説^{セツ}者^{シャ}流^{リウ}於^オ韓^{カン}聽^{テイ}者^{シャ}孔^{コウ}於^オ辭^ジ
知^チ此^{コノ}二^ニ者^{シャ}則^{ソク}不^フ可^カ以^イ忘^{ワス}とつる世の議論^{ギロノ}説^{セツ}法^{ホフ}
儒^{ニホ}佛^{フツ}の^ノ論^{ロノ}争^{ソウ}は皆^{ミナ}辯^{ベン}は^ハ諸^{シヨ}侯^コ乃^ハ勝^{シヨウ}負^フふ^フて
道^{ダウ}徳^{トク}の^ノ勝^{シヨウ}負^フは^ハわ^ワる^ルを^ヲさ^サま^マ也^ヤ市^シ高^{カウ}
の^ノさ^サま^マい^イと^ト利^リと^ト争^{ソウ}ひ^ヒ勝^{シヨウ}負^フと^トは^ハつ^ツる^ルや
同^{ドウ}く^クと^ト孔^{コウ}子^シの^ノわ^ワく^クと^ト無^ム聲^{セイ}之^ノ樂^{ガク}と^ト無^ム射^{セツ}之^ノ禮^レと^ト
服^{フク}之^ノ喪^{モウ}此^{コノ}之^ノ謂^{イハレ}と^ト無^ムと^トつる此^{コノ}語^ゴ實^{ジツ}に^ニ孔^{コウ}子^シ
の^ノ語^ゴは^ハわ^ワる^ルと^ト無^ムと^トつる人^{ヒト}ありと^ト禮^レ儀^ギと^トわ^ワる^ル

為人の戒となすは又禮と内と而して一なりと
捨つれ病いとあることなりや

曲禮に禮は兵と云ふ人其説は礼の費へを

志し不満足樂へ不可極と云ふ又君子は不盡

人々歡とある取らざるなり又禮は不盡と云ふ

ことばまたよく思ひ及んぬるは是なり

樂記はよく玉不琢不成器人不學不知道也

又嘉肴ありては弗食するの旨と云ふ不知

と云ふ至道なりといふも弗學はうへる善を

不知の譬へ勸まれば訓誨此句は祖と云ふ

班固が云く安其所習毀所不見終以自蔽と見

學者乃通病なり況や初學者人を初學者の

いさゝ知識少くして蔽るる事却てと云ふ

博覽多聞の學者此蔽と云ふなりや

同書に獨学而無友則孤陋而寡聞といふ初

學者人なりと云ふは中く害と云ふことなり

安んずるなりといふ益友善友なり聞ては

そは今其博學博識の數といふなり六藝に委

しく五倫の道と窮むるは博聞とすべし云ふ

善友と云ふは德業相助る事なり初學者

るる亦又事なりて只まうととる人い善道と聞
事寡きなり孤陋といふも文筆をたれり
をいふいなり意乃固偏野甲なるなり
なり

史記小樊噲曰大行ハ不顧細謹大禮ハ不辭
小讓とわり学者吾り行乃憚る事なりなり
にが非とする事なりなり此語と證と今
の世乃学者何等のより大禮とある樊噲が
大行大禮といふい天下を執りた志を徒に
あるをたもけて漢を興起とるい大行大禮の

なりなりと今人乃大行大禮といふなり
同項羽のといふ留責なりて不降故郷ハ如衣繡衣
行誰り知るといふ後世人乃口實とする句なり
るの主意ふなりなり實の君なりなり留責ふ
して故郷より親族のより恵を郷人乃舊
恩を謝し孤獨に恤むべきなりなり主意なり
御黨の人ハ親しむ禮教情の軍と畏伏なり
と欲して故郷に帰るい小人乃主意なりなり
朱買臣が語なりなり項羽と賢臣の意ハ知なり
同秦本紀ハ前事之不忘後事之師也といふ

入漢書賈誼傳云前車覆後車誡云同
意れ句なり學者乃歴史と云ふ皆此句れ主意
夫子春秋の作又思此教誨に終るなり
董仲舒曰正其義不謀其利明其道不計其功
此句此句仲舒の真儒なる事明るなり
者小益あるれ諸方よりまゝへさるや又清獻公乃
諸行好事莫問前程と云ふ同意なり
事ハ天理なり

易乾文言小同聲相應同氣相求水流濕火就燥
雲從龍風從虎聖人作而萬物覩と云ふ此語

を以て見る所の萬物の氣の類を以て相感
と悪人よハ惡氣を善人よハ善氣と一念
之善ハ景星慶雲一念之惡ハ風雨と云ふ定
小禍福ハ又つゝ招くは理なり
同坤文言小積善之家必有余慶積不善之家必
有余殃といふ是善惡相感ハ禍福自ら招り
證文畏かへされ聖訓なり但佛家の因果之義
と其解異なり處あり輕重に著過と云ふ以
同云く君子敬以直内義以方外敬義立而德
不孤といふ内介の字初學誤る事なり

儒の説と闕王内外の文字小泥むやわは
告子義外乃説又他はわらうひも

同謙乃家又天道虧盈而益謙地道變盈而
流謙鬼神害盈而福謙是聖人の訓戒忍く
されりや書大禹謨少と滿招損謙受益時
乃天道也又豐乃卦れ言小日中則昃月盈
則食天地盈虚與時消息而況於人乎況於
鬼神乎とつう天地乃盈虚の鬼神も適
まか況や人なるふやわてや元龍有悔い
とんや萬物もやわてや

同解乃六二は負且乘致寇至貞吝世間の萬事
みまものく相殺と不相殺とわけて時と不
ふ叶い意とるに全く又相應は背さの
とるなりて久しうんと歎といふはあふ
よむりて身を失ふをいふは是々人貪りて
富むる真似し賤さ人の責めがはのり負て
余のふいそ奴婢の車にまわらるやわれし賤
後て財寶ありやとやいふ是は殺し奪はん
終り寇のふりては僅に謹む事ありと
いふも是事といふ適々るやわつと

程子三不幸とのべし諸少年にて高科に登
かいて其不幸なり又その勢い席て美官と
なりその不幸なり高才なりて文章と能なり
これ不幸なりといふ誠有りて其識あり
今世の学者朱子程子に信仰ありて
諸とい用ひて子弟と教ゆふみ此戒訓
能といいまこ小学のよといなりふ詩文と
事と專要とすいつなり故なり此乃志
これ唯名と求りて人な勝てたりとあ
まばなり

儒者ふはくあり腐儒卑儒曲儒浪儒難貴
科儒顯枉儒迫儒霸儒逸儒雅儒真儒
馬貞白の質言ふなり又此外又儒雅儒俗
儒狂儒賊儒といふありとみたり
醫者ふはくありとるて莊隱居の軒岐
正論より儒醫明醫德醫あり隱醫世
醫僧醫あり名醫時醫流醫あり女醫好醫
淫醫癩醫あり又藪醫といふ和俗の語なり
野巫醫なりとるや呪い加持にまて病と療
とるなりといふ

司馬溫公の六悔銘あり富時不謙貧時悔醉裏
狂言醒後悔官行私曲去時悔健時不藥病時
悔幼而不習老後悔德時不學過后悔常小
塵壁小記と毎日拜する人さるなり
類經攝生の語と與天和者樂天之時與人
樂人之俗とあり人生修養の助あり語也
淮南子小神越者其言華德蕩者其行偽又
曰人無言而神有言者則傷念慮不得卧
止念慮則有為と我主意あり
素問善言始者必會於終善言近者必知其

遠道孤託人のあわれむ句なりや
史記老子の曰聰明深察なりて近死者歟んて
人と議する者也博辯廣大なりて危其身者
人の惡を察く者なり為人子者母以有已
人の臣とてい以く已と有るは母れ孔子
の世家小出より此句老子の孔子に教訓有
語なりとみるなり何ぞ此句は孔子門人より語
録に六經より出づは事いふなりやん
わき所あり

張氏正義は我と以く物と視ふ時に則我人

道はもて物我は體とるなり則道之なり
故に君子は大方の道と大いに我と入る
者へ狂と免るなりといふは今時儒佛の
學者のいつまにあらざるや

皇極經世書小人の神明は則天地の神明より
人のより歌く天地と歌くなり不愼哉と
いつり又禮記の禮運は人者天地之心也といふ
かゝる同一主意あるふ似たり但禮記の句意は
仁と主とでなり

書の泰誓は天地は萬物之父母惟人の萬物之

靈といふのみる上の語句と一意

詩の蕩之篇は靡不有初鮮克有終といふ戒
りその毎に也れ有るはくはみ

同瞻仰之篇は哲王成城哲婦傾城婦有長古

維厲之階なりといふ女人の柔才なる戒め

たり傾城の二字是より神より傾城といふ都て

女といふなり遊女のいふなり今の花女

は古人に戒しむるなり又牧誓は

女人の多しを牝雞の晨とふなり戒めり

書の多方は惟聖と罔念狂とを惟狂と克

念へい作聖といふ事をして不思ふといふ思
て不学といふ危といふ事又おれい
同周官小作徳心逸して日休作偽心勞して
月小徳といふ事戒慎といふ徳なりといふや
同秦誓小責人斯無難惟受責俾如流是惟
難哉又云く佐々勇士射御不違我尚不欲
といふ初の語に己が智小慢といふ事ありや後
乃白い勇小伐人人を戒めりや受責如流といふは
諫め順い過を改む事流水の速く去て還
らざるごとくに胸臆い過を停む事なき

故夫夫まといふ事佐々といふ武篇とてなるは實
乃夫夫といふ事といふ事なり

素問小善く天言のいふ人よ徳と善くさ
といふ者いふ事小驗といふ事此句深意あり
人といふ事同いふ事あり天地の化と論といふ
こといふ事主として理其中にあり人を論する
こといふ事主として氣具命と徳といふ天地の間
盈虚い皆一え氣也氣乃外又別小元亨利貞
をいふ事と二つといふ事いふ事人なるは精神
作用皆氣にて其間主事とて善くいふ事

ありきものい理なり此は理氣人なほてい
二つありてわいど是と一つふとはわく天地
い無きありて人の欲ありていふや大儒の
論なり

又選よ氏田不進履李下不正冠と學者より
い蓋ありてさ語なり又曰本秀於林風必摧行
高於人衆必誅是學者の心得べき句なり
四不闘の語い誰人やらん忘れり不與命闘不
與法闘不與勢闘不與理闘とさ

四不文の語あり春寒秋暑老健君寵皆是又

いありて愛と人乃刻一なり

處窮四味あり無事以當貴早寢以當富安
歩以當車晚食以當肉とさ貧ふ處する
乃教りて富人に教とさ句なり

居郷四幼あり徳業相勸過失相規禮俗相
交患難相恤此の孫防の四休あり仍四休居
士く早寢麤茶淡飯飽即休補破遮寒暖
即休之平二満過即休不貪不妬老即休
是又日用ありとやとの訓戒なり三平二
満の妻乃嬖と云ふ三平の額とあゝの頗乃

平らふて面乃るふ、まはつゝ二満の腹と
胸^{うぶ}に生く大なる也いつても悪女といつて
妻の衣食の當^{いづま}にわらふてゐるもの
あれい飢寒^{うへ}にふと助もくふあつゝ悪女
あつゝ同一とちり蟻^{あま}と女の我も執^{しつ}着^{ちやく}乃貪^{いひ}
つちく又他人の犯^かとくま妬^{ねた}ふく心裏常
小静ふてよふは貪^{いひ}妬^{ねた}をて老郵安樂
なるの公殊勝^{こうしゆ}の境界^{くわいがい}なり

送^{おく}徳^{とく}乃人といつてふおのの身^み身^みの穢^けは
一きふらあつて全^{ぜん}なるをちたを

對^{たい}勝^{しやう}の儀^ぎありと凡^{おほ}俗^{しやく}の人といふ情^{じやう}欲^{よく}
を翻^{かへ}て事^{こと}あつていふ死^しなるあつて死^し脱^{だつ}うを
とく称^{しょう}とま唐^{たう}土^どの事^{こと}いふは日本^{にっぽん}乃風^{ふう}
俗^{しやく}禮^{れい}はよ貴^き人^{にん}より土^ど民^{みん}よむふとあつて
身體^{しんたい}乃陰^{いん}而^にあつて人乃同^{ひとのどう}觸^ふえ
ひる事^{こと}あつて人乃の禮^{れい}はよ是^{こゝろ}人間^{にんげん}と
のほつて誠^{まこと}情^{じやう}なりといふや聖^{せい}人も佛^{ぶつ}も凡^{おほ}
夫^そ衆^{しゆ}生^{せい}貴^き人^{にん}をちと身體^{しんたい}乃穢^け物^{ぶつ}いふ
あつてまはれ是^{こゝろ}はあつていふ人の眼^{がん}
觸^ふえつて其^{その}氣^きとけがごとくその自然^{しぜん}に

人情なり此人情ふはるきそやいふくも人を
有のまゝいふとていふ一なるは見識とて人
情を欺さるるやうくさるゝとわづかしの
目みけをさる事、私曲のなり義ふわゝに禮め
わゝに孝子いふ母の唾漬とてわゝに自然の
誠情なりいふや身は陰不をやまゝ人の眼は
神明の榮精とてまゝ體乃る上から下品の私
様、逆づき觸しむるに求むく人の陰様と
窺ひるる何いふのう身體乃神氣にけりす乃
眾なり又そのまゝに陰様とてわゝに人なりを

あひつゝ人を様との罪非禮の甚き者也此なり
社系れ或は路次よりわゝに様物とて一目にわゝに
是非あけしは憚はとてたふらうかゝててふ
みる何い様と受て神前より様なりとてやむ社道
乃戒律なる後より佛はとて此戒あるや
は兼經安樂の品の中は僧徒乃女人は對て法
を説きあるふわゝのまゝに腦かゝるわゝに肌を
と女ふもふもあひつゝ事なりといふ何いふや
身の陰に穢物をや是とて様ゆゑわゝにひびき
あひつゝ儒佛神の禮は宵々事とてわゝに

